

# 詩篇137篇8-9節 破壊者であるバビロンの娘よ、あなたがわれらにしたことを、あなたに仕返す人はさいわいである。あなたのみどりごを取って岩になげうつ者はさいわいである。この箇所は解釈しにくい箇所として有名ですが、どんな解釈がありますか？

## 詩篇137篇8-9節

破壊者であるバビロンの娘よ、  
あなたがわれらにしたことを、  
あなたに仕返す人はさいわいである。  
あなたのみどりごを取って岩になげうつ者はさいわいである。

この箇所は、旧約聖書の中でも非常に解釈が難しく、しばしば議論的となる部分です。なぜなら、表面的には「敵の子どもを岩に投げつけることをよしとする」強烈な復讐心を表しているように読めるからです。以下に、主な解釈の方向性をまとめてみます。

## 1. 文脈的・歴史的背景からの解釈

### (1) バビロン捕囚の苦しみ・恨みの吐露

- 詩篇137篇は、イスラエルの民がバビロン捕囚中に「故郷を奪われ、神殿を破壊され、自らの子どもも殺された」という圧倒的な苦しみの中で歌われたと考えられています。
- この詩篇が書かれた当時の歴史的現実を踏まえると、「復讐」を願う激しい嘆きと怒り、そして神に正義を求める切実な叫びとして理解されます。

### (2) 当時の戦争観・価値観

- 古代の戦闘では、敵の民族を根絶やしにする行為（子どもを含む虐殺）は残念ながら珍しいことではありませんでした。
- そのような時代的背景を踏まえると、「子どもを岩に投げつける」という表現は残酷さを隠さないあからさまな敵討ちの言葉ですが、当時の文化・慣習レベルでの過激な表現であると見ることもできます。

## 2. 文学的表現としての解釈

### (1) 嘆願詩・呪詛詩（インプレカトリー・サーム）としての位置づけ

- 詩篇137は「嘆願詩」「呪詛詩（インプレカトリー・サーム）」と呼ばれるジャンルに分類されます。これは、敵に対する激しい呪いを神に訴える詩の形式です。
- このような詩が聖書に含まれているのは、人間が経験するあらゆる苦しみや憤り、敵意までも神の前にさらけ出すことの大切さを示していると言えます。

- したがって、ここで語られる過激な言葉は、人間の感情の「生々しい叫び」として捉えられることが多いです。

## (2) 象徴的表現としての解釈

- 教父や一部の神学的伝統の中には、「バビロンの子ども」とは「罪の芽」「罪の小さいうち」の象徴であり、「岩に投げつけて砕く」は「罪を完全に断ち切る」という象徴的表現であると読む解釈があります。
- ただし、これを全面的に霊的解釈で置き換えることは、本来の歴史的な文脈や当時のユダヤ人の切実な叫びを薄めてしまうおそれもあります。

---

## 3. 神学的・信仰的な視点からの解釈

### (1) 神の正義と人間の怒り

- 詩篇の文脈では、最終的に「正しい裁き」は神が行われるとされています。
- そのため、このような詩篇の「呪いの言葉」は、自力での復讐ではなく、神に公義の実現を委ねる叫びであると捉えることもできます。
- 人間の痛切な怒りや悲しみを神の前に素直に表明する一方で、その裁きを神に委ねる姿勢が読み取れるとする解釈です。

### (2) 人間の罪深さ・限界を浮き彫りにする

- これほど過激な復讐心が聖書に記されていること自体、人間の深い罪性や絶望、報復感情の苛烈さを示しています。
- それをそのまま「肯定すべき行為だ」と読むよりは、神の前に自分の真の感情を隠すことなく示し、神にゆだねることの大切さを学ぶところだと解釈する立場があります。

### (3) キリスト教解釈との関係

- 新約聖書では、イエスが「敵を愛しなさい」（マタイ5:44など）と語るため、この詩篇の復讐の言葉とは対照的です。
- したがってキリスト教会では、「復讐心そのものを肯定するための箇所ではなく、人間の弱さや苦しみ、怒りの極みに至る叫びが神の前に正直に置かれ、それでもなお神の憐れみと恵みにより、最終的には赦しや和解へと導かれる」という流れで理解されることが多いでしょう。

---

## 4. 具体的な解釈のまとめ

### 1. 歴史的・文脈的アプローチ

- バビロン捕囚期のイスラエル人の絶望と深い怨嗟の吐露として理解する。
- 当時の戦争観・価値観を踏まえたうえでの、過激な「報復の呪いの言葉」。

### 2. 文学的・ジャンルのアプローチ

- 呪詛詩（インプレカトリー・サーム）の一例。人間の苦悩や絶望的怒りを神の前に表出している。

- 象徴的・霊的な読み方では、「罪を断ち切る」という表現に重ねて解釈する場合もある。

### 3. 神学的アプローチ

- 神の前に本音をさらけ出す祈りの形であり、裁きを神に委ねている。
- 新約の教え（敵を愛する）との整合性においては、このような激しい詩篇が**人間の罪深さ、怒りの感情をありのままに示す**ものであるととらえ、そこから「それでも神の憐れみに頼る必要性」に気づかされるという読み方がなされる。

---

## 5. 解釈の際の注意点

- 聖書のテキストにおける暴力的表現を直ちに「**神が命じる正しい行為**」として読み取ってしまうのは危険です。
- 聖書には、歴史的・文化的コンテキストやジャンルがさまざまあり、それぞれの文脈で「人間の声」がどのように神へ訴えているかを読む必要があります。
- 同時に、聖書全体の大きなメッセージ（創造、罪、救済、神の愛と公義）を考慮して解釈することで、暴力的な表現もまた「人間の嘆きと怒りを神に差し出す」祈りとして位置付けることができます。

---

## 結論

詩篇137篇8-9節は、イスラエルの民の悲痛な嘆きと恨み、そして神の公義を求める叫びが赤裸々に表現された箇所です。過激な言葉遣いは当時の戦争観や呪詛詩のジャンルに由来し、そのまま文字通りの「暴力肯定」ではなく、**人間が抱える憎しみや復讐心までも神の前にさらけ出し、それを最終的に神の裁きと憐れみに委ねる**ことを示唆すると多くの解釈者が考えています。

そのため、現代の私たちがこの箇所を読む際には、**単なる暴力や復讐の是認として読むのではなく、人間の抱える痛みと怒りのリアルな表現が聖書に書き残されている意味**を洞察しつつ、「神が究極的に正しい裁きを行い、人間はその前に本音を注ぎ出してよい」という希望の側面を見出すアプローチが一般的です。

---

## 預言書の中に、同様の残虐な行為は書かれていますか？

詩篇137篇8-9節のような、「**子どもを投げ打ち殺す**」という激しい報復や裁きの描写は、旧約聖書の預言書（イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書、十二小預言書など）にも散見されます。特に下記のような箇所では、類似した残虐なイメージが示されています。

---

### 1. イザヤ書13章16節

彼らの幼子はその目の前で打ち碎かれ、  
その家は略奪され、その妻は犯される。

ここでは、**バビロンに対する裁きの宣告**として、幼子が打ち碎かれるという過激な表現が用いられています。イスラエルの敵（バビロン）が滅ぼされる情景を、預言者イザヤが神の裁きとして描写したものです。

---

## 2. ホセア書13章16節（日本語訳では14章1節となっている場合も）

サマリアはその神にそむいたので、必ず荒れすたれる。  
彼らはつぎに倒され、その幼子は打ち砕かれ、  
そのはらみ女は裂かれる。

北王国イスラエルの首都サマリアが滅ぼされる預言の中で、**幼子が打ち砕かれる・妊婦が裂かれる**という恐ろしい裁きのイメージが語られています。これは、当時の戦争の実態（残虐行為）をそのまま預言的に表現したものと見られます。

## 3. ナホム書3章10節

しかるに彼女は捕え移され、捕虜となり、  
その幼子たちは、町の大通りのすべてのかどで打ち砕かれた。  
くじをもってその尊い人をひきとり、そのすべての大いなる者は、  
鎖につながれた。

ここでは、**アッシリア帝国の首都ニネベ**に対する裁きの預言として、幼子が町の大通りで打ち砕かれる描写が登場します。

## 4. エレミヤ書13章14節

わたしは彼らを互いにぶつけ合い、  
父も子も共に滅ぼす。  
わたしは容赦せず、惜しまず、憐れまず、  
彼らを滅ぼし尽くす。

ここでは「幼子を岩に投げつける」という表現こそありませんが、「父と子がともに滅ぼされる」という**世代を問わない神の裁きの激しさ**が語られ、残酷な印象を与えます。

## これらの表現の背景・解釈

### 1. 歴史的・文化的背景

- 古代の戦争では、敗北した国の住民が根絶やしにされること（子どもや妊婦の虐殺を含む）は珍しくありませんでした。
- これらの預言は、当時の残酷な現実をあえて生々しい表現で示し、「神の裁き」として描き出していると考えられます。

### 2. 神学的視点

- こうした箇所は「神がそのような暴力を“望んでいる”」と単純に結論づけるのではなく、「罪に対する裁きの恐ろしさ」を象徴的に強調している、と理解されることが多いです。
- 一方で、預言書の記述は、敵国に対する神の裁きを預言者が宣告しているという体裁のため、人々に「悔い改め」「神への立ち返り」を促す警告としても読まれています。

### 3. 文学的特徴（預言の表現手法）

- 預言書の言葉はしばしば**詩的・象徴的なイメージ**を用いており、残虐な行為の描写によって危機感や絶望感を強く煽り、読者に迫る意図があります。
- 他方で、実際に歴史上行われていた惨劇（戦時の蛮行）を反映しているため、文字通りに理解される場合もあります。

### 4. 現代における読解

- 現代の感覚で読むと極めて残酷な描写ですが、旧約聖書が書かれた時代の戦争観や裁きの考え方を踏まえる必要があります。
- さらに、新約聖書の「敵を愛する」教えとの対比の中で、旧約時代の民が置かれていた切迫した状況や、彼らが味わっていた苦しみと怒りを知ること、**人間の罪深さや正義に対する神の裁きの重み**を改めて考察する材料ともなります。

---

## まとめ

旧約聖書の預言書には、詩篇137篇8-9節に類似する「**幼子が打ち碎かれる**」などの残虐な行為が、神の裁きや戦争の実態を象徴的かつ生々しく描いた場面としていくつも登場します。これらは当時の戦争の現実を背景としつつ、預言のメッセージとして「罪に対する断固たる裁き」「悔い改めを促す警告」「神の公義の恐ろしさ」を強調する役割を担っていると理解されます。ただし、こうした残虐な表現を現代の倫理や価値観に即して直接的に肯定するわけではなく、「**聖書時代の戦争観や神学的メッセージをどのように受け止めるか**」を吟味しながら読むことが大切です。